



新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として生田キャンパス入構制限継続中のため、一般の皆様にはご来館いただけずご不便をおかけしておりますこと、心よりお詫び申し上げます。

現在、一般再開時期は未定ですが、

2021年も明治大学平和教育登戸研究所資料館を何卒よろしくお願ひ申し上げます。

第11回企画展

「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった！ —登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ—」 開催



2021年1月13日から7月3日まで、第11回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった！」を開催します。

登戸研究所に関する資料・データは、敗戦時にことごとく焼却・隠蔽され、研究所関係者も戦後長らく口を閉ざし続け、

登戸研究所の秘密は完全に消滅するかに思われました。

しかし、今から30年以上前、1980年代の終わりの頃に、登戸研究所ゆかりの地域の市民・教員・高校生らによって登戸研究所掘り起こし運動が始まりました。ちょうどその頃、長らく口を閉ざしていた登戸研究所の関係者も、親睦団体である「登研会」を結成し少しずつ集うようになっていました。

市民・教員・高校生たちは、研究所関係者らを訪ね、信頼関係を築きながら、登戸研究所で何が行われていたのかを少しずつ明らかにしていきました。そして、明治大学にも登戸研究所の歴史を研究するグループが生まれ、市民・登研会・大学関係者が連携して登戸研究所掘り起こし運動が展開されるようになりました。

今回の企画展ではこうした掘り起こし運動を振り返り、どのように登戸研究所の秘密が明らかにされていっ

たのか検証します。

■ オンラインでも同時開催します！

今回の企画展はオンラインでも同時開催します。どなたでもご自宅などからパネルや展示資料を見ることが出来ます。右のQRコード、または<https://www.meiji.ac.jp/noborito/event/index.html>よりご覧ください。



■ 関連イベント

①オンライン講演会（※後日 YouTube 配信あり）

(1)「登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ」

2021年3月20日（土・祝）13時～14時30分

講師：渡辺賢二（資料館展示専門委員）

(2)「資料館開館に向けての明治大学の取り組み」

2021年5月15日（土）13時～14時30分

講師：山田朗（館長，文学部教授）〔今後の状況により実会場開催となる場合は資料館HP，SNSでお知らせします。〕

※(1)，(2)共通：zoomウェビナーにて開催 / 定員400名 / 無料 / 要事前予約，開催1週間前までに氏名・メールアドレス・希望講演会名を noborito@mics.meiji.ac.jp に送信してください。翌開館日以内に折り返しアクセス方法をご案内します。なお，必ず noborito@mics.meiji.ac.jp からのメールを受け取ることが出来る設定にしてください。

②企画展展示解説会動画配信（YouTubeにて公開予定）

配信時には資料館HP，SNSでお知らせします。



資料館の非公式看板猫ふみふみちゃん（以下㊦）が、渡辺賢二先生（以下㊧）から、四半世紀以上にわたる調査の秘話を聞くコーナーです。

- ㊦ 「渡辺先生，こんにちは。さっそくだけど，登戸研究所にお勤めだった人たちって，同窓会みたいなことをしていたの？」
- ㊧ 「『登研会』のことですね。私も登戸研究所のことを調べている中で仲間に入れてもらいました。」
- ㊦ 「特別に？」
- ㊧ 「そうですね。私は元勤務員ではありませんから。」
- ㊦ 「どんな活動をしていたの？」
- ㊧ 「遡れば敗戦直後に若手の元第四科勤務員らが懐かしんでお正月に再会していたみたいですね。1960年代にはほかの科も加わって，科長，所長も参加して，揃って温泉旅行に行っていた写真が残って

います。正式に登研会が発足する80年代より前から元勤務員同士の交流はあったみたいです。」

- ㊦ 「あら温泉旅行なんてしてたの，楽しそう！」
- ㊧ 「ですが，この登研以前の会は，元勤務員が互いにマスコミなどに余計なことを話さないよう見張る，自己監視組織のような性質もあったと思うんです。元科長級がテレビで話し始めるまでは登戸研究所のことを公にするなんて考えられませんでしたから。上の人がいなくなって，今になってやっと当時のことを話せるという人もいます。」
- ㊦ 「えー！さすが登戸研究所，戦後も秘密の二オイがするわ。先生，今日もありがとうございました。」

（第六回 おわり）（椎名真帆）

シリーズ Q&A

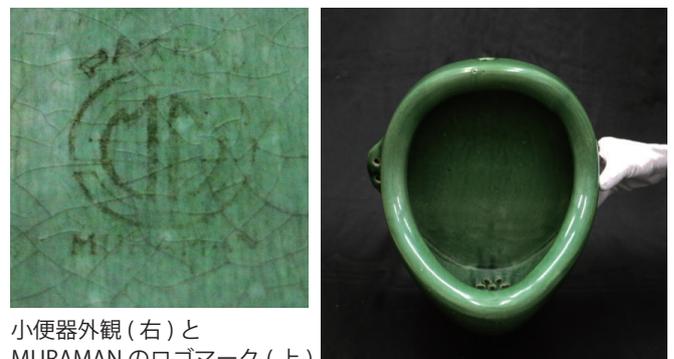
第十六回 村万便器の謎を追え



コロナ禍で休館していた6月頃，当館職員が構内を散策しているとキャンパス某所で土に埋まった青磁色の陶製小便器を発見しました。その見た目からこれって登戸研究所時代のものでは？と気になり時代の特定を進めました。

泥だらけの小便器をよく見てみると，小便器の出っ張り部分に薄くロゴマークと「PATENT，MURAMAN」の刻印が見られました。MURAMANは愛知県常滑市を本拠地としていた村万製陶所のことです。一度戦時統合で無くなっていますが，記録上，大正時代には存在しており，1961（昭和36）年まで存在していた最古の便器メーカーの一つです。村万製陶についての資料を所蔵する「INAX ライブミュージアム」のお力をお借りして調べると，村万製陶は1933（昭和8）年に「青磁色陶磁器製造法」で特許（PATENT）を取得していたことがわかりました。新しく発見された小便器はいつ頃のものなのでしょう？

今回，新たに発見された小便器のロゴマークを比較すると戦前のものである可能性が浮上しました。また，便器は青磁色から白色へ変遷していくこと，戦時中陸軍省が白色便器を指定していたことをふまえると，登戸研究所の前にこの場所にあった日本高等拓植学校が設立された1932（昭和7）年から1939（昭和14）年頃の間ではないかと考えられます。しかし，使われていた場所など，不明な部分も多いため今後も調査を続けていく予定です。



小便器外観（右）とMURAMANのロゴマーク（上）
（当館所蔵）

「INAX ライブミュージアム」の所蔵資料を確認すると戦時中と戦後の村万陶製のロゴマークが判明し，

（文責・撮影：2020年度博物館実習生 農学部農学科4年 市石宙・佐藤翠音，監修：登戸研究所資料館）

特別寄稿：アルバイト職員のエッセイ 「登戸研究所資料館で働くということ」②

■ 前回に続き、現在、登戸研究所資料館で活動しているアルバイト職員のエッセイ「登戸研究所資料館で働くということ」掲載の第二回目です。

私は、昨年7月より博物館学を専攻する社会人大学院生として登戸研究所資料館で働くことになりました。館内の展示資料解説や生田キャンパス内に点在する戦争遺跡案内には、翌8月から奉職することになり限られた日数で基本的な知識を入れ、初めての来館者に対応させて頂きました。それから今まで日々、何度も資料を読み返し、解説体験をしても慣れる事や満足いく結果には至りません。というのも、学べば学ぶ程、知れば知る程、常に新たな発見があり飽きることの無い懐の深さが登戸研究所にはあり、パズルを1ピースずつ埋めていくような喜びがあります。来館者の方々のリピート率が高いのも納得の結果です。この事を踏まえて私が一番気を付けていることは、如何に正確

に歴史的事実を伝えつつ、観覧者の興味を引くか、それでいて語り過ぎない解説や案内が出来るかに気を配ることで。

一般的には、戦争遺跡や戦争関連施設は負の遺産として扱われますが、ここ登戸研究所資料館は、それらとはまた異なった魅力があると思います。戦争というフィルターを通すと体験者によっては破却すべき忌む場所になりますが、人類の進歩や、わずかでも勝利の希望を追求した研究所であったと捉えると、また違う視点に立つことが出来ます。決して負の遺産を正当化するものではありませんが、今の世だからこそ人々が正しい判断を身に付けるヒントが得られる場を提供できるかと思います。(戸倉博之)



当館には日々多くの方々にご来館いただいています。それは、実際に戦争を体験された世代の方、近現代史に関する深い知見をお持ちの方、歴史を本格的には学んだことのない若い世代の方など、実に様々です。このように多様なの方々に対して、資料館のガイドとして「歴史を語る」という仕事は案外難しいものです。ましてや「秘密戦」という学校の教科書では語られないことのない戦争の〈裏側〉を伝えるには、展示資料について淡々と解説するだけではありません。その歴史の意味や背景を織り交ぜながら説明する、我々が当たり前で使用しがちな歴史用語について噛み砕いて説明するなど、いくつかの工夫が必要になってきます。私も

このことを念頭に置きながら、「秘密戦」の実態を伝える仕事に日々従事しています。

来館者の方々には、些細なことでも構いませんので、気になったことがあればぜひ質問をしていただきたいと思います。なぜなら、実際に歴史の舞台となった場所に身を置いて感じたこと・想像したことが、歴史を今に続く問題として考える上で重要な土台になるからです。また、職員である我々とは違う観点からの斬新な問いは、歴史研究を展開させていく基礎にもなるものです。来館者の方々と共に、「秘密戦」の歴史を継承させていけることを願っています。(三澤拓弥)



登戸研究所の事例からは、科学者や一般市民の、戦争との複雑なあり方が見えてきます。そこでは「科学の発展」と「軍事利用」との関係、あるいは、「科学者の使命感ないし地域住民の生活」と「戦争協力」との関係のように、相反するようにも思える要素が境界なく混ざり合い、絡み合っていました。特に後者に関しては、登戸研究所は生活の場であると同時に戦争協

力の場でもあったと言い換えることができるでしょう。そのため、登戸研究所という存在そのもの、あるいは、そこに勤務した人々を、単純に戦争協力を強いた／強いられた存在というような、単純な構図でとらえることはできません。私は日々、登戸研究所に勤めた方の証言の文字起こしをしています^{かいご}が、彼らの証言を通じて反省や悔悟と共に、楽しかった思い出の[次ページへ]

〔承前〕日々を懐かしむ様子を感じる際に、彼らと登戸研究所の関係性が持つ「複雑さ」を強く意識させられます。

こうした「複雑さ」の実態・構造を明らかにし、提示することが、登戸研究所資料館で働く上での重要な重要な要素の一つであると思っています。ただ、「複雑さ」を明らかにすると言っても、それは過去の完全な再現にはならず、私の解釈という領域に止まらざるを

得ません。なぜなら、私という個人は今を生きており、過去の出来事を直に見聞きすることはできないからです。それでも、証言の書き起こしなどを通じて見出した「複雑さ」に対する私の解釈を、展示解説などを通じてお伝えすることで、来館した方々にも歴史や戦争をめぐる「複雑さ」について、考えてもらえればと思っています。(渡井誠一郎)

資料館からのお知らせ

■ 学生・教職員限定開館のご案内

1月現在、本学学生・教職員限定で水～土曜の10～16時(日～火曜、祝日休)で開館しています。限定開館に関する注意事項など、詳しくは資料館HPをご覧ください。祝日は休館しますのでご注意ください。

■ 動画配信情報

登戸研究所資料館は次の3本の動画をYouTubeで順次公開します。

①講演会「帝銀事件と陸軍登戸研究所」(2018年12月15日開催、講師：館長 山田 朗) ※公開中

②「明治大学平和教育登戸研究所資料館 10周年を迎えて」(コンテンツ：館長ご挨拶、展示専門委員 渡辺賢二 10周年を迎えての言葉、館長おすすめの展示案内) ※公開中

③「第10回企画展『少女が残した登戸研究所の記録』展示解説」(講師：館長 山田 朗) ※本年1月公開予定
「登戸研究所資料館 動画」で検索のうえ、是非ご覧ください。

■ 第三展示室「動物慰霊碑」写真バナー展示開始

川崎市在住の写真家、小池汪氏撮影の登戸研究所史跡「動物慰霊碑」写真バナー展示が第三展示室で始まりました。この「動物慰霊碑」バナー、日没後に撮影されているため、彫り込まれた文字が印象的に浮き上がり、迫力があります。日中に実物をご覧になったことがある方も、是非、この圧倒的な存在感を感じてみてください。

〔バナー写真左：表面撮影側、右：裏面撮影側〕



編集・発行：明治大学平和教育登戸研究所資料館

発行日：2021年1月29日

〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田 1-1-1
明治大学生田キャンパス

TEL/FAX：044-934-7993

E-mail：noborito@mics.meiji.ac.jp

URL：http://www.meiji.ac.jp/noborito/index.html

twitter  https://twitter.com/meiji_noborito

facebook  https://www.facebook.com/Noboritoshiryoukan

Instagram  https://www.instagram.com/meiji_noborito/

※一般のお客様へ

現在、新型コロナウイルス感染予防対策のため、引き続き大学構内には大学関係者以外お入りいただくことができません。制限解除の目途が立ちましたら、当館公式HPやSNSにてお知らせします。

ご迷惑をおかけしており大変申し訳ございませんが、資料館の一般公開まで今しばらくお待ちください。



デザイン協力：2020年度博物館実習生 農学部農学科4年
市石宙・佐藤翠音